

小特集・「少子化」はどこに向かうのか

この小特集では現代的な課題に迫る書籍を選び、それをテーマにして、編集同人がそれぞれ自由なスタイルで執筆しています。今回のセレクトは、山田昌弘『日本の少子化対策はなぜ失敗したのか』（光文新書、二〇二〇年）と、毎日新聞取材班『世界少子化考 子供が増えれば幸せなのか』（毎日新聞社、二〇二二年）、牛窪恵『恋愛結婚の終焉』（光文社新書、二〇二三年）です。

総務省の人口推計では、日本は二〇二三年一月まで十四年連続で人口が減少。二〇二二年度は、はじめて出生数が八〇万人を下回り、合計特殊出生率は一・三パーセントを割り込みました。女性を中心に語られがちな「少子化」問題ですが、経済格差や学歴偏重による社会問題、テクノロジの発達、民族としての歴史的な戦略、多様化する社会の枠組みなどが複雑に絡みあい、今や世界全体が取り組むべき課題となっています。「少子化」はどこから来て、どこに向かうのか。その原因と人類の未来の形を探ってみます。

さようなら、「少子化問題」

池上貴子

「子供が増えれば幸せなのか」。

毎日新聞取材班によって投げかけられた問いは、つまり、

「頭を冷やせ」ということだ。

二〇二二年、経済学者である佐藤一磨が、子どもを持つことが女性の幸せにどのような関わりを持つかについて、データを用いて定量的に明らかにしたことがある。^①結果は、子どもを産んだ女性の方が、産まない女性より生活満足度（幸福度）が低く、子どもが増えるほど更に満足度は低下していくというものだった。

原因として佐藤は、お金、夫婦関係、家事・育児負担の三要素を挙げている。予想通りといったところだが、ここで立ち返りたいのは、男女問わず、誰だって不幸になる道をあえて選ばないということだ。確かに「女性の結婚適齢期」クリスマスケーキ」理論が社会にまかり通ったバブル期までは、慣習や経済的に自立できない状況、妻子を養わないと一人前と見なされない社会の上に、ラブ・ロマンスへの憧憬が分厚くコーティングされ、恋愛結婚への道を「王道ルート」として若者たちに選択させてきた。しかし、その暗黙の了解（強制力）の効力は今や完全に切れている。

この社会の動きを捉え、「結婚には恋愛が必要だ」という固定観念を廃し、大胆な少子化対策を提唱したのが、牛窪惠著『恋愛結婚の終焉』（二〇二三年九月）だ。著者の牛窪は、まず恋愛結婚の土台にあるのはヨーロッパの一時代（十八〜十九世紀）にだけ流行した「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」という幻想にすぎないとその優位性を否定した。そして、経済格差がもたらす恋愛のハードルの高さ、結婚成立の難しさに立ち往生する現代の若者たちに、「結婚と恋愛を切り離して考えるべき」として、恋愛結婚に代わる「共創結婚」なる婚姻の概念を提唱したのである。それは、恋愛を通過せず、趣味や目的意識の共有からなる共同体内での婚姻だ。「情熱的な恋愛からの結婚」を信奉する

人には信じられないだろうが、SNSやオンラインゲームなどで共通の仲間と緩くつながることに慣れた現代の若者のニーズに合うものであるのは確かだ。

しかし、本著はやや説明不足なところもある。

令和の社会も「結婚するかしないか」の二択に留まらず、早急に「多様な」結婚や家族の形、すなわち（選択的）夫婦別姓や事実婚、同棲婚、そして同性婚や未婚で出産するシングルマザー、養子縁組などの多彩なバリエーションを整備すべきだと思います。それこそが、Z世代をはじめとした令和のカップルが、「誰かと共に創りあげていきたい」とする「共創」を取り入れた新たな婚姻の概念、すなわち『共創結婚』に繋がるからです

この多様性に配慮した環境を提案する言説の裏側で、結婚という制度への帰着を促し、子どもを産ませることを最終ゴールとしている点に引掛かりを覚えた。どうしてもフラットになれない、日本の少子化対策が乗り越えられない壁は、おそらくここである。

かつて政府の失策により団塊ジュニア世代（氷河期世代）の多くが非正規雇用や買い叩かれた正規社員として離散した。今になって政治家は、男女ともに「産ませる身体」や